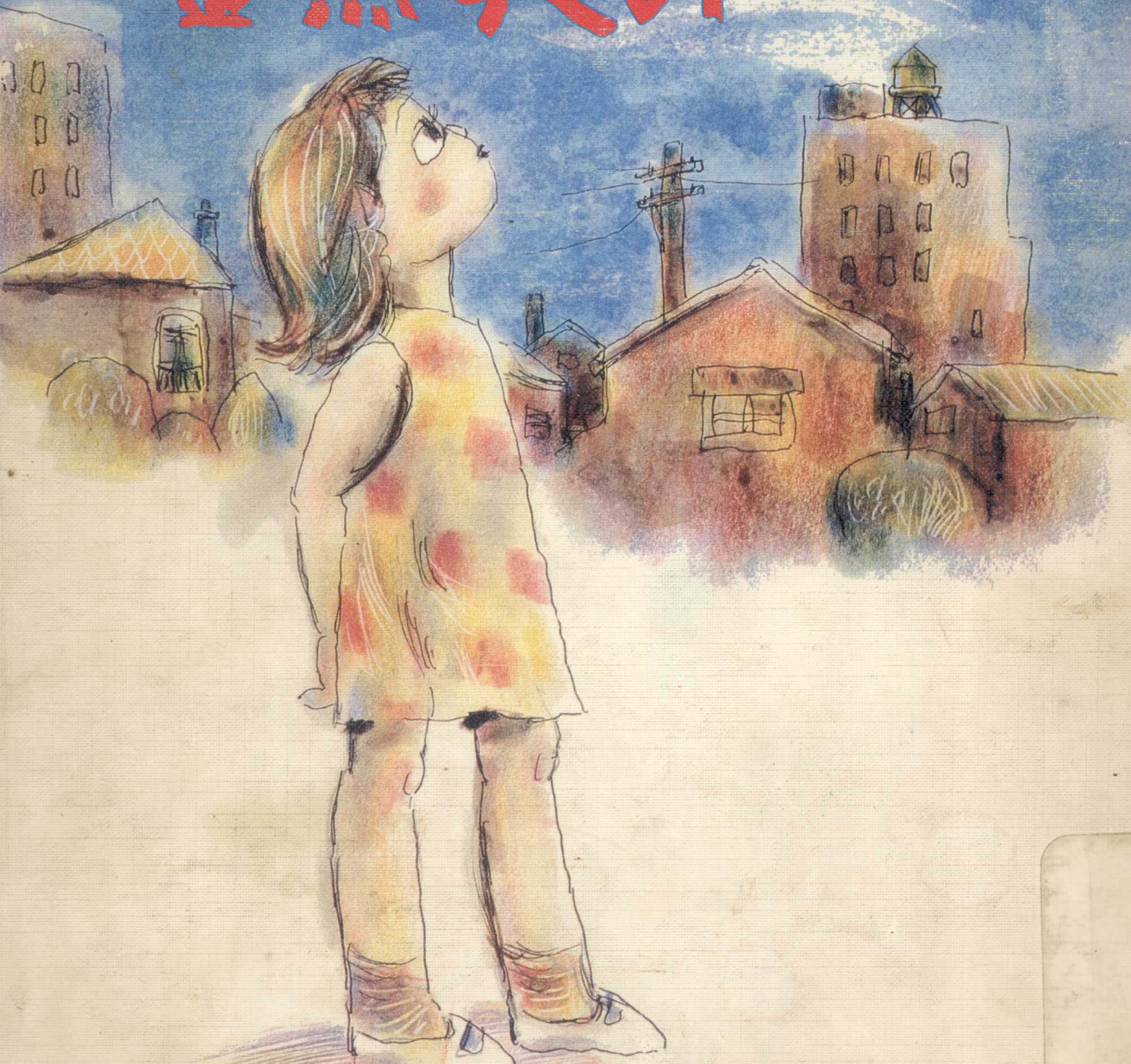


さなえちゃんの きん きょ 金魚すくい

皿海達哉・作
小林与志・絵



■著者紹介 皿海達哉

1942年大阪に生まれる。東京学芸大学卒業。
高校で教鞭をとるかたわら、同人誌「牛」
に所属し、創作活動が続けている。作品に
『少年のしるし』『なかまはずれ町はずれ』
『チッチゼミ鳴く木の下で』（野間児童文芸
推奨作品賞）『坂をのぼれば』（第1回旺文社
児童文学賞）『風のむこうに』などがある。

*現住所＝〒720 福山市千田町藪路

74-76

■画家紹介 小林与志

1925年東京に生まれる。広告会社、デザイン
工房の仕事などを経て、61年ごろからさ
し絵を描きはじめる。作品には『青春は疑
う』『加木九太郎校長先生』『おむすびころ
りん』『こびとのくつや』『ぼくたちの三月
十日』などがある。児童出版美術家連盟所
属。

*現住所＝〒125 東京都葛飾区東金町

1-36 公団住宅1-1225

913

皿海達哉

さなえちゃんの金魚すくい

国土社 1981

80P 23×19cm（国土社の創作とっわ18）

さなえちゃんの金魚すくい 〈国土社の創作とっわ18〉

1981年2月25日 初版第1刷発行

1981年11月25日 第3刷発行

著者 皿海達哉

発行者 長宗泰造

印刷所 厚德社

発行所 国土社

〒112 東京都文京区目白台1丁目17-6

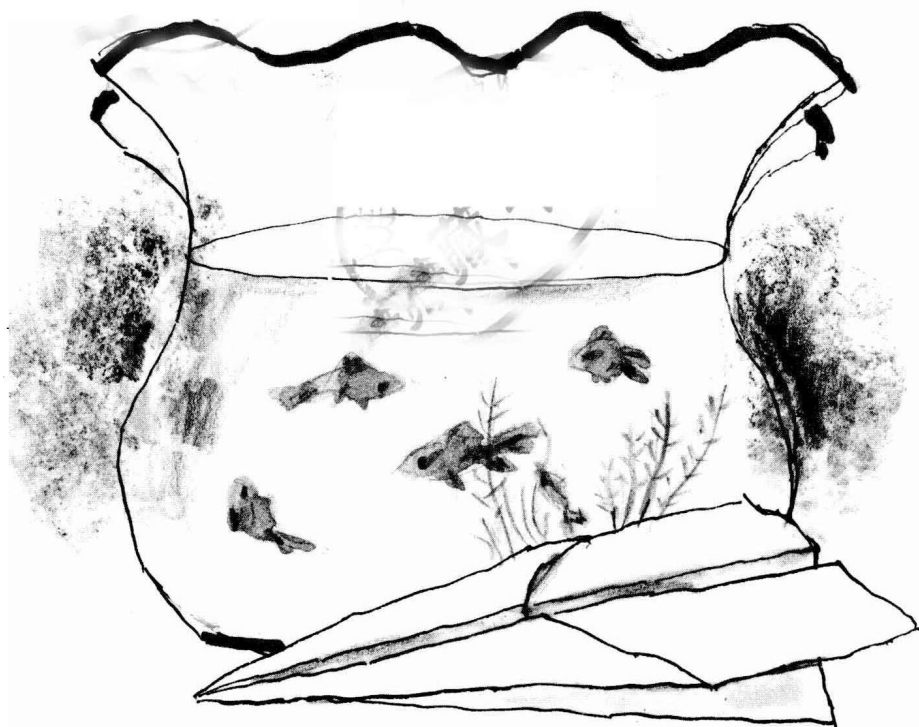
電話 東京943-3721／振替 東京6-90631

© 1981 T. Saragai & Y. Kobayashi

落丁・乱丁の本はお取りかえします。〈検印廃止〉

さなえちゃんの^{きんぎょ}金魚すくい

皿海達哉・作／小林与志・絵



Ⅰ いやな 紙ひこうき

「かあさん、あたしのいる このおうちは、だれのもの？」

とつぜん、早苗さなえにそうきかれて、お母かあさんは、びっくりした。

「まあ、どうしたの？ さなえちゃん。さなえちゃんのおう

ちは、さなえちゃんのおうちですよ……。」

早苗さなえは、すかさず、次つぎのしつもんをした。

「じゃあ、かあさん。あたしんちの下は、だれのもの？」

早苗さなえのお母かあさんは、ジャガイモをむいていた手を 休めて、

台所だいどころから出てきた。

「へんなことばかり きくのね。せまいけど、このおうちが たつてるところも、うらにわも、みんな、さなえちゃんやとうさん、かあさんのものですよ。」



「どこまでも？」

「どこまでも。」

早苗^{さなえ}は、目玉をでっかくして、きいてくる。お母^{かあ}さんも、おなじように 目を大きくして、答える。でも、目は、早苗^{さなえ}のほう
うが大きい。

「かあさん、かあさん。じゃあ、あたしんちの上も、あたしん
ちのものなのね？」

早苗^{さなえ}は、またまた いきおいこんで たずねてきた。

お母^{かあ}さんは、たいへんだ。お父^{とう}さんのたすけを かりようと
しても、お父^{とう}さんは、まだ 会社にいる。

「上って、空のこと？ ……うーん、そうねえ どこまでも

うちのものと思つて いいんじゃない？」

まったく、早苗^{さなえ}は、なんのために、こんなことを きいてく
るのだろう。あらためて 考えてみると、じぶんの家の 上や

下は、どこまでが　じぶんのうちの　ものなのか、よくわからない。

「かあさん！　ほんとよね、いまのこと。ずっと、ずっと、あたしんちの　上の空は、あたしんちのよね！」

早苗は、ひとりで　まくしたてると、何を思ったのか、パツと　外へかけだした。

お母さんは、エプロンで　手をふきながら　台所へもどると、ガラスまどごしに、外をのぞいてみた。

台所からは、ゆらりと　さいた　三つの黄色い　ひまわりの花と、古ぼけた　げんかんの柱が見える。げんかんのむこうには、白いガードレールがあつて、すぐ　自動車道になつてゐる。

早苗は、その道路のはしに　木のまるイスをもちだし、足を



くみ、うでもくんで、やねの上のほうをにらんでいる。

くちびるをつきだして、しんけんな表情だ。

「さなえ、さなえ。あぶないじゃないの！ 自動車にひかれちやうわよ！」

お母さんは、おもわず、大声を出した。

早苗のうちは、平屋だての古い家で、へやの数も三つしかない。台所と六じようまと四じよう半の三つだ。

お金ができれば二階をたてまそうと、お父さんは、くちぐせのようにいつている。早苗がようちえんに入る前からいつているのだから、もう三年以上も、いいつづけていることになる。

「とうさん、二階、たてる たてるって、いつになったらたてるの？」

いっしよに おふろへ入ったときなど、早苗がきくと、お父さんは、

「ふーむ、そうだなア、さなえが、およめに いくときまでにはね。」

なんて、のんきなことを いったいる。

その早苗のうちの すぐ 目と鼻の先に、なんと 23階だての マンションが たっているのだ。

明るい クリーム色のかべに、こげ茶色の 鉄わくのついた かわいいベランダが、まるで 西洋のおとぎの国の お城のよう ならんでいる。

場所は、東京の目白駅近くの 高台で、そのマンションから見はらせば、池袋の サンシャイン60のビルは もちろん、皇居や 東京タワー、国会議事堂、後樂園球場、新宿御苑、明治神宮、新宿西口の超高層ビルなど、なんでもが 目の下に見える

る。

国電山手線の電車が池袋駅から出て、だんだんスピードをあげ、またスピードをおとして、目白駅のプラットホームにすべりこんでゆくなど、まるでおもちゃを見ているようにかわいいのだ。

そういうマンションだから、下を通る人たちは、みんな、

「ほう。」

と、かந்தんの声をあげて、てっぺんを見あげる。マンションの横にある、みすばらしい平屋だてのうちなど、だれひとり見るものはいない。

早苗は、いま、くやしそうにそのマンションを見あげているが、ほんとうをいうと、その建物がきれいなものではなかった。

早苗^{さなえ}は ブルドーザーがやってきて 広い土地^{とち}をならすところから みんな見ていた。

黄色いヘルメットをかぶった 工事現場^{こうじげんば}の人たちが ふえをふきながら クレーン車を動か^{うご}かして 鉄ざい^{てつざい}をはこび そろそろと つりあげてゆくようすなど いくら長く見^みていても あき^あき^きな^なかつた。

早苗^{さなえ}は、下から見ると 豆^{まめ}つぶのようにしか見えない その男の人たちが すき^すき^きだ^だつたし、さいごに できあ^{できあ}が^がつた クリーム色のマンションも すき^すき^きだ^だつたのだ。

ただ 早苗^{さなえ}は、さいきん 22階^{かい}の 西のはずれのへやに ひっこしてきたらしい 一家^{いっか}の 小さな男の子が、しょっちゅうベランダに出^でて、紙のひこうきを とばすのだけは、がまんでき^きな^なかつた。

ある日の夕ぐれ、なにげなく マンションを見あげていた



早苗^{さなえ}は、てっぺんに近い　ベランダの一つから　少年^{しょうねん}が　白い紙くずを　すてたのを見た。

紙くずは、まっすぐに　おちてこず、くにやくにやと　ゆれながらおちてき、とちゅうからは　スウィーツと　横^{よこ}にすべって、むかいの花屋^{はなや}さんのほうに　いってしまった。それは、紙ひこうきなのだった。

そのうち、早苗^{さなえ}は、ときには　朝はやく、ときには　夕ぐれの光の中で、少年^{しょうねん}の黒いかげが、小さな紙ひこうきを　とばすのを、しよっちゅう　見かけるようになった。

（あの子ったら、じぶんが　高いところに　住^すんでいるのを、あたしたちに、見せつけているんだわ。）

早苗^{さなえ}は、それを見るたび、はらがたった。

少年^{しょうねん}は、しだいに　ひこうきづくりがうまくなり、とばしたひこうきが、きりもみしたり、ビルにつきあたたたりすること

も、ほとんど なくなった。気流にうまくのと、くやしいけれど、ほんとうに みごとというほかないほど、遠くへ かるやかに とんでゆく。

白く 小さな紙ひこうきは、東京タワーにむかって、サンシヤイン 60 にむかって、後樂園球場にむかって、まったく 気持ちよさそうに とんでいったのだ。

二階もなく、とばすとすれば、せいぜい 勉強づくえの上にながって とばすしかない 早苗は、おこらざるをえない。一度、西武デパートの屋上の 金あみごしに とばそうしたら、守衛のおじさんに、こっぴどく しかられてしまった。気の強い 早苗は、くやしくて、すこし なみだが 出てきたほどだった。

「さなえちゃん、あぶないじゃないの！ こんなところで 何

してるの？」

お母^{かあ}さんは、サンダルをつっかけて、表^{おもて}へ出、早苗^{さなえ}に声をかけた。

あたりは、日ぐれまじかで、さみしい　うすいあかね色にそまっている。

「あのね、あたし、ばんぺいしているの。あのマンションの22階^{かい}のへやから、男の子が　ひこうきをとばすのよ。それが、あたしんちの上空^{じやうくう}を　とばないように、見^みはりしてるの。」

「まあ、上空^{じやうくう}だなんて、おおげさね。さなえちゃん、いいじゃないの、ひこうき　とばすくらい。」

「一回や二回なら、まだ　いいのよ。あたしんちに　ことわりなく、毎日、何回だって　とばすんだから！　かあさんも、さつき　いったでしょ。あたしんちの　上の空は、あたしんちのものだって。」

お母^{かあ}さんは、じぶんのうちと、となりの でっかいマンションとを 見くらべて、ちよっと おかしく、また、ちよっと 悲^{かな}しくなった。早苗^{さなえ}の気持^{きもち}ちも、なんとなく わかるような気がする。

そのとき、ほんとうに、22階^{かい}のベランダから、スウィーツと、小さな白いものが とんだ。ひこうきだ。

「あら！」

早苗^{さなえ}よりはやく、お母^{かあ}さんが見つけて、ゆびさした。

「ほらね！」

早苗^{さなえ}も、いそいで イスの上に たちあがった。あんまりあわてたので、イスが ぐらぐらゆれ、おっこちそうになった。

「あつ、あぶない！」

お母^{かあ}さんが とんでいって ささえると、早苗^{さなえ}は、例^{れい}の 大きな目玉を くるくる させながら しがみついてきた。